

プログラム

まずは15分でわかる！
愛着障害の理解と支援

★増えている「気になる」子ども

近年、教育・保育・福祉・育児の現場で、さまざまな行動の問題があり、その対応、支援、指導に困難を極める「気になる子ども」が増えています。

「言うことを聞かないのに、文句や要求ばかりする」
「今までやってきた対応・指導ではうまくいかない」
「してはいけないことを注意すると、余計その行動の問題が増える」
「激しい暴力行為が突然起き、抑えても収まらない」
などなど、教師も保護者も困っている現状があります。

★愛着障害・愛着の問題を抱える子ども

こうした子どもたちを理解する視点に、愛着（アタッチメント）の問題を抱える子ども、愛着障害（AD）という視点が必要です。愛着の問題は以前から、発達心理学で指摘されてきたのですが、学校園等々の現場で実際に支援にかかわってきた筆者の目から見ても、明らかに、愛着障害、愛着の問題を抱えた子どもたちの支援ケースが急激に増えているという実感があります。

愛着とは「特定の人に対する情緒的絆」のことで、子どもにとって、恐怖や不安から守ってくれる「安全基地機能」、そこに行くことと落ち着く、ほっとする「安心基地機能」、そこから離れても大丈夫で、離れて行ったことを報告して認めてもらう「探索基地機能」の三つの機能があります。この絆が育っていない問題が、愛着の問題です。

一方で、愛着の問題、愛着障害についての誤解や偏見、タブー視も多く、正しく愛着の問題を理解した子どもへのかかわりが行われていない場合も多いのです。そこで、愛着についての誤解

を「愛着（障害）の六つの誤解」としてまとめてみました。

★愛着（障害）の六つの誤解

その1…産んだ母親の責任であるという誤解

産んだ母親が必ず愛着形成しなければならぬわけではなく、これは、父親や親戚、周囲の大人も含めて、誰かが母親機能を果たしていない問題としてとらえるべきです。

その2…育て方の問題という誤解

愛着は母子相互作用としてとらえられるもので、愛着障害は関係性の障害です。親の育て方だけに問題がある、子どもだけに問題があるというのではなく、その子の特性、特徴と親の育て方が合わない、つまり、相性の問題としてとらえるべきものなのです。

実際、同じ親が同じ育て方で育てたきょうだいの一方でだけ、愛着の問題が起こることも多いのです。

その3…親の養育を受けられない場合や、親から虐待を受けた場合だけに見られる現象という誤解

不適切なかかわりとはいえない親の養育を受けた通常家庭の子どもにも愛着障害、愛着の問題を抱える子どもが増えており、親御さんも困っているケースが多いです（困っていることを認め

ない場合も含めて)。

その4…愛着障害、愛着の問題は世代間伝達するという誤解

虐待でもよく指摘されるように、愛着障害のこどもの親も愛着障害である事例に確かによく出会います。しかし、筆者は以前、調査研究から、こうしたケースでは、親の育てられ方だけが影響したのではなく、親が子育てする際に、再度、自分の親(祖父母)から、親としての自分にとって脅威、苦痛と感じられるかわりがあったことが子育てに悪影響していることを発見しました。

親は自分の親によって二度傷ついているのです。適切な子育て支援の介入があれば、愛着の世代間伝達は防げます。

その5…愛着障害は取り返しがつかない、「もう遅い」という誤解

愛着形成に臨界期があり、生後一歳六か月頃までに形成されないとその後形成はできないという考え方が以前ありましたが、それは間違いです。今でも、敏感期と言って、こどもが大きくなると鈍感になり、愛着形成・修復が難しいという考え方がありますが、筆者は、多くのこどもでの愛着修復に成功した事例から、それを明確に否定したいと思っています。

誰かが適切な愛着修復のかかわりをしていないからそう見えるだけであって、愛着形成は生涯発達するものなのです。

その6…他者による愛着修復支援が、親との関係を悪化させるという誤解

筆者が実施している愛着修復支援プログラムは、実際の親だけではなく、学校と保育所の先生方に親代わりになっていただいで実施しています。その際、そうした特定の愛着関係を他者と持つてしまうと、家庭にいる親との関係が悪化するのではないかという懸念を持つ人が多いためです。これは、愛着形成は、生涯、一人の人とだけ結ぶ絆であるとの誤解からくるものです。

愛着は、肉親、恩師、親友、世話になった人、人生の伴侶等、生涯多くの人と結ぶ関係です。むしろ、直接、親子に働きかける支援は、両者の思いの食い違いの大きさから困難を極めることが多いのですが、そうしたことも先に愛着とはどういう関係かを他者との間で正しく経験させることで、かえって親子関係は修復されやすくなるのです（「その人しかだめ」という間違った愛着修復をした場合のみ失敗します）。

★愛着修復は「いつでも・誰にでも」可能

このような誤解が、愛着の問題に気づいていても、親の責任として放置したり、親の領域には立ち入れないと思つて支援できずにきた原因なのです。愛着の問題となると、親が責任を追及され、「育て方が悪い」と非難され、しかも「もうこの子どもが大きいから手遅れ」と言われ、周りにはノータッチ。これで誰がやる気を持つてかかわれるでしょうか？

このような誤解に基づくタブー視を乗り越え、愛着修復は、どの発達段階でも可能である、親

はもちろんのこと（いつでもやり直しできる）、心理専門家による心理療法や医療による治療ではなく、その子に深くかわるチャンスのある人なら、保育士、教師、指導員等、誰でも可能であるのです。

★ 愛着障害と発達障害の混同・混乱

さらに、現場での問題を複雑化しているのは、愛着障害と発達障害との混同・混乱です。「発達障害との診断があり、研修で学んだ支援方法を実施したが効果がない」「発達障害が疑われたので受診したが、発達障害ではないと診断され、どうしていいか途方にくれている」等の相談も多々いただきます。これは、専門機関や医療機関においてさえも、発達障害と愛着障害の適切な峻別・鑑別アセスメントがされておらず、そのため、支援が混乱しているのです。

一方、愛着障害の診断基準も複数あり、統一されておらず、改訂のたびに変更されたりして、統一的理解に達していないという問題もあります。愛着障害の専門家は世界的にも、そして日本ではなおさらのこと、極めて少ないのが現実です。

★ 愛着障害の見極め方…発達障害との違い

現場において必要なのは、発達障害と混同しやすい愛着障害、愛着の問題を抱えることを見

極め、適切な支援をすることです。

実は、現場でこどもの様子をつぶさに見ることが可能な人ほど、正確に愛着の問題を見つけることができます。医療関係者が正しく診断できない原因の一つが、保護者の訴えだけにより、こどもの実態をしつかり観察できていないことにあります。だからこそ、筆者は現場に出かけ、こどもを見せていただくことを大切にしてきました。

発達障害のうち、ADHD（注意欠如多動性障害）は、実行機能、「行動」の問題を持ちます。ASD（自閉症スペクトラム障害）は、いろいろな問題を持っていますが、その根本はとらえ方、「認知」の問題です。それに対して、愛着の問題は「感情」の問題であり、外からいちばん見えにくく、かかわる際、つい相手の感情に期待してしまうため、対応、支援にも失敗しやすいのです。愛着の問題は、感情の問題ですから、本来、こどもの行動だけで見極めることは難しいのですが、低年齢ほど、行動の問題として現れやすい（最近、中学生以上でもわかりやすい行動を示す場合が増えており、こどもがその意味でも幼くなっています）ので、筆者が長年の研究で明らかにしてきた、行動チェックによる愛着の問題発見ポイントを紹介します。

★愛着の問題発見チェックリスト

表は愛着の問題発見のためのチェックリストです。少々、解説を加えていきます。

①の「多動」という特徴は、「落ち着きがないか、多動か」だけをチェックしたのでは、発達障

表 愛着の問題発見チェックリスト

①多動	愛着障害=[ムラ] のある多動/ADHD=[いつも] 多動/ASD=[居場所感] 喪失時に多動 (月曜日朝多動/週後半多動/午前午後の時間帯や教科、場所による多動)
②モノとの関係	⇒愛着「移行対象」の問題 (モノをさわる/さわりながら歩く/振り回す/なくす/落とす/モノに囲まれる)
③口の問題	(口にモノや指を入れる/モノや身体・衣服を舐める・噛む)
④姿勢・しぐさの問題	(姿勢の崩れ/身体の揺らぎ、触る、動かす/服装の乱れ)
⑤人への接触	⇒脱抑制タイプ (べたべたと抱きつく/まとわりつく/飛びつく/潜り込む/抱きつき攻撃) ⇔抑制タイプ(後ろ・前等の立ち位置による拒否/かかわり拒絶)
⑥床への接触	接触快欲求・包まれる安心感欠如 (靴や靴下を脱ぐ/すり足/寝転ぶ/這い回る/寝技的に蹴る)
⑦危険な行動	高所・投擲・痛さへの鈍感 (高い所に登る/高い所からモノを投げる/飛び降り/窓から出入り/痛がらない)
⑧愛情欲求行動	注目されたい行動 [自作自演事件・愛情試し行動・愛情欲求エスカレート現象] (自分で事件起こし報告/叱られるか試し比較/満足不能/静寂潰し)
⑨自己防衛	ウソ・否認・他責⇒自己正当化=安全・安心基地感欠如 (目撃されてもしたと認めない/人のせい/解離状態)
⑩自己評価の低さ	自己否定・自己高揚⇒意欲の低さ(「どうせない」無力感/自信のなさ/根拠のない自信・虚勢/他者への指摘)⇒学習指導困難・低学力
⑪片付け	ADHD=行動の困難⇔愛着障害=(したい) 気持ちのなさ⇒規範遵守行動困難
⑫自閉系の愛着障害	[籠もる] (フードや帽子・タオルを被る/不必要なマスク/カーテンやロッカー・戸棚に隠れる)+[執拗な・フラッシュバック的・パニック的攻撃]=[居場所感] の危機⇒焦点的・混乱的・爆発的攻撃 (~だけを何度も/突然 [理由不明] 泣き叫びつつ大暴れ)
⑬関係性の視点	愛情の行き違い (欲求と授与の食い違い/タイミングのズレ/特性に応じた対応の欠如/気持ちの確認漏れ)